

# 航空

## 回想（我が軍歴）

### 学徒動員

兵庫県 柏井博之

私は神戸市生田区（現中央区）で誕生しました。現在は歓楽街ですが、大昔は鬱蒼と生い茂る生田の森でした。後醍醐帝の声に応じて「錦の御旗」の基に馳せ参ぜし「楠正成一族」は、この生田の森にて軍議を行い、「七生報國」を誓って湊川の決戦場に臨み、足利尊氏軍に寡兵奮闘するも一敗地にまみれて散華しました。その遺徳を偲び、湊川神社があり、また水戸光圀公の建立とい

う「嗚呼 忠臣楠氏の墓」等々が往時を偲ばせま  
す。

私の家族構成は、両親の下に五人兄弟の次男（姉一人）でした。家業は紙類全般の間屋です。特に高名な各地方特産の高級和紙・唐物の古紙・西洋紙等々手広く商売を行っていました。あの頃は従業員も番頭さん、丁稚さん、小僧さんと奥向きの人と多くの人が働いておりました。生活状態は一応世間様同様でした。学業も義務教育修了後、旧県立第一高等商業学校（「県商」と云う）を経て、大阪府立経済大学に進学しました。

日本国も明治維新以後、明治大帝の臣として徴兵制度が施行され「富国強兵の地歩を一步一步と強固なるものとし、教育も幼児より「男子は大和

魂」、女子は「大和撫子」との教育を行い、軍部はますます増長し、政界にまで圧力を加え、世を挙げて軍国日本に驀進ぼくしんしました。そして五・一五事件、二・二六事件など、いわゆるクーデターがあり、政府首脳を殺戮し、国政の場を占拠する等々のことがある。

昭和十六（一九四一）年十二月八日、米英蘭と決戦の火蓋が切られ、第二次世界大戦（大東亜戦争）に突入しました。序戦の優位も、ミッドウェー海戦を境としてガダルカナル以降攻守ところを変えて敗退となる。

国民には誇大戦果を発表して士気の高揚を計る。勿論、歌舞音曲等は官憲の許可を得る事、奢侈禁止令で女性は装身具から化粧・服装に至るまで禁止され、男は国民服、女はモンペで「ぜいたくは敵だ」、金銀銅鉄等金属の供出で、寺院の梵鐘から家庭の鍋釜まで供出することとなる。「一億国民火の玉だ」「欲しがりませぬ、勝つまでは」となり、政治的には大政翼賛会が発足。婦人達は

「国防婦人会」「愛国婦人会」また古い「五人組」の組織を取り入れて隣組制度などいづれも中央からの指示・命令に基づき「可・否」なく言論行動を一にさせられた。

学業には徴兵延期制度があったが、「青天の霹靂」のごとく昭和十八年「学徒動員令布告」となり、全国の大学及び旧制高専の男子学生は全員徴兵対象者となり、兵隊検査を受けることになった。

同年十月、神戸軍管区の人は神戸山手小学校において壮丁検査を受ける。私は甲種合格になる。同年十二月一日付で西部第五十一部隊、姫路第十師団野砲兵連隊・第四中隊四班（中隊長片山中尉）に入隊。一〇センチ榴弾砲の挽馬部隊であった。

「初年兵の心得五カ条」

第一 早めし、早がけ、早ぐそ

第二 要領を旨とすべし、員数の確保

第三 地方弁を使うな、そして大きな声

第四 軍馬は兵器、陛下からの預かりもの。兵隊は一銭五厘（ハガキ一枚）の消耗品だ。

第五 軍隊は、メンコの数（食事の事）。右五カ条を旨とすべし、だった。

国宝姫路城の北方四キロにある広峰山標高（百メートル）の山麓に東西千メートル、南北千メートルの軍用地があり、その中央を東西に道路が走る。北側が東から輻重隊・野砲隊・騎兵隊（捜索）と三個部隊が位置し、南面は軽飛行機が離着陸できる広大な所だった。名称は城北練兵場。

軍事訓練は砲の操作・乗馬・通信・観測と各部署の練達である。乗馬訓練は一般の巻乗り・速歩・早駆け・遠乗り、そして馬具を装備して砲の牽引作業がある。御者三人、前中後、馬は二頭ペアーの六頭立てで牽引する。西部劇のスターにもなった気持ちかせぬでもなかったが、後馬の御者となれば、馬体重七〇〇キロ以上の巨体で背中

が広く騎座が締まらぬと、悪路では、砲を引く木幹が跳ね上がって、足を払われて落馬するケースも間々あり、危険度の高い訓練である。

六頭の馬軍をつけ砲車に繋ぎ引かすまでの準備は、厳しい訓練を重ねなければ予定の時間内に参らぬもので、三人の御者が協同して作業する訓練の反復である。現代も競馬が好きになれない理由は、あの当時馬の世話をさせられたからだと思われる。

軍隊では馬は大切な兵器である。何事にもまずお馬様が優先である。各中隊には専属の既があり、馬当番がそれぞれ一頭ずつ割り当てられる。生き物であるだけに管理が難しい。特に馬は腸が細く長いので飲食のチェックが大切である。水嗽と称して、一日に二回以上水飲み場へ連れ出し、一口・二口・三口と喉を鳴らしながら飲むのを確かめ、何回飲んだかを当番下士官に報告、記録して健康の管理をするのである。

朝は兵科の者より三十分早く起床し、厩でまず

馬糞の回収、寝草干し、金櫛による馬体の手入れ、蹄蹠の手入れ、そして飼葉（岩塩を充分いれる）を与える。すべて終了後に、兵隊の朝食になる。何事でも朝飯前の一仕事と云うが軍馬に関しては重労働だった。

また廊下不寝番ともなれば、徹夜で自隊の馬の管理を二人で担当するのだ。当番士官の巡察があるので怠けることはできない。初年兵を体験して、つくづく人間に生まれたのを情けなく思うのであった。

厩の各棟は中央に通路があり、馬頭を壁に向けて繋ぐので両側の馬に同時に蹴られると逃げ場がない。元来、馬は臆病で「オーラ、オーラ」と掛け声をかけて予告すれば、まず蹴られることがないが、当初は甚だ危険を感じたものである。私に割り当てられた馬は「家泰号」、ノルマンディー系の後馬で七五〇キロもあった。おとなしい性格で良く懐いてくれた。馬は甘味品が好物です。角

砂糖や人参を手当てして手なづけた。

中隊には数十頭の馬が在籍し、中には初年兵では扱い切れない癖馬もいる。一番たちの悪いのは熊癖馬で、後脚で立って抱き付く。負傷だけでは済まぬ場合もある。しかし、愛情があれば心が通じるのは人も馬も同じだ。しかも癖馬ほど乗馬として良いと云うのも皮肉なものだ。馬の腹痛は命取りになりかねない。馬の腸は細く長いので直ぐ詰まる。もしもの事があれば係は営倉（罰として獄舎入り）ものである。

非常事態となれば、当番だけでなく班をあげて手当にあたる。バケツに浣腸液を入れ、上からホースで肛門に注入する。馬の両腹を藁でこする。一生懸命だ。効果があるとホースをもった浣腸係は、一度に排泄物を頭から全身に浴びて馬糞だらけ。しかし軍馬は陛下からお預かりした兵器、責任を果たせた喜びが大きく、全員で祝盃をあげた次第だ。

内務班教育は舎外訓練以上に初年兵には厳しい。自分の身の廻りは勿論、二年兵（モサ）の世話、銃器の手入れ、班内の整理整頓、何一つ欠けても古兵殿の「イビリの対象」となる。それを軍隊では「気合を入れる」といって幾通りもの「ペナルティーの手法」がある。「ミンミン」「自転車」「寄っていらっしゃい」「三八式歩兵銃殿」「對抗ビンタ」と名称が付いていて、二年兵のリードで毎晩各班で競って行われるのである。

一番矛盾を感じたのは「對抗ビンタ」だ、初年兵同士が向かい合って頬べたを張り合うが、二年兵が監視していて、良い加減にはできず、段々と真剣に殴り合いになる。奥歯を噛み締めて眼をつむりながら（心の中では共に赦せると）まるで喜劇であり、かつまた悲劇そのものだった。脱落者のほとんどは、これらの制裁によるもので、我が中隊でも、一人放馬（営内から脱走）、一人自殺者が出たのである。

営内生活を経験せぬとわからないが上等兵とも

なれば神様で、階級とメンコの数は絶対的である。

楽しみと云えば、軍歌演習や酒保（物品販売・飲食所）、家族の面会と外出許可で映画館へ行く位だった。なお「我が国の軍隊は世々天皇の統率し給うところ」であり、上官の訓話や命令の中で陛下のお名前が出る度に「畏れ多くも」がつくが、その時、直ちに全員が直立不動の姿勢を取ることになっている。新聞雑誌に掲載された御真影は必ず箱に入れお納めする規定である。

また方言言葉と軍隊言葉の違いの一例を挙げれば、ポケットは物入れ、シャツ、ステテコは襦袢、股下。ゲートルは巻脚絆。また不動の姿勢は「軍人基本の姿勢にして、内に軍人精神充溢し外敵肅端正ならざるべからず」と。このような名詞言語が自然に話の中に出て来るようになると軍人精神が入って来たことになる。班から一歩でも出る時は、廊下の端で必ず大声で目的と行先を申告する。例えば「柏井二等兵廁へ行って参ります」。

また帰班の時「柏井二等兵只今廁より帰って参りました」という報告をしなければならぬ。

翌年三月、甲種幹部候補生の教育過程中に、陸軍航空士官候補生を受験せよと一方的に命ぜられた。軍馬との付合で嫌気がさしていたので、喜んで受験を決意した次第です。姫路第五十一部隊より柳瀬士官候補生と二人、宇都宮の陸軍飛行士官学校へ受験のため出張です。体力検査・手足のバランス・視力は最重要で一・二以上、紙上の能力テスト等。終了後、小生一人合格通知を受領。直ちに下志津陸軍司偵師団（師団長片倉少将）第七司偵学生として入隊する。同期学生は全兵科より選抜された候補生から少佐までの四十人、集合教育を受ける。

学科は気象・通信・写真航法が主たるもの。実技教育は陸軍双発高等練習機である。航法が一番の難関で、基本学習のあと地点から地点の陸上飛行から、三点の三角航法になり、最終の海上訓練

飛行となる。経験を積みぬと中々予定通りに目的地に到着しない。飛行機の風防ガラスを幌で覆って、計器のみを頼りの飛行訓練が続く。それぞれのコースで風向風速が違うのでそれを修正しながら飛ぶ。最初の変針でのミスが最終点では、何一〇キロも違うことになり、教官から注意され通しである。しかし、お互い命にかかわることなので必死。徐々に上達していく。

しかし実戦に入れば、気象班からあらかじめコースの天候を聞いて、飛行航路を作成する。高々度になると地形の影響を受けないが、一万メートル以上になると冬季は偏西風が強く吹く。向かい風になると減速され、到着時間がそれだけ遅延することになる。また高空では酸素マスクを使用しながらの通信・写真・偏流測定・偵察等の任務を完璧にこなすのは容易でない。

我が中隊長、斎藤大尉は南太平洋・東南アジア戦線で体験した猛者で、敵機の背後からの攻撃を直感で掴むような人であったから生き残れたとの

事。現在と違い機材が悪く、まさに神業で、宮本武蔵級の名人か達人の境地でないと、新司偵の立派な空中勤務者とはなれないのである。

同期生中には、学習や飛行訓練について行けず、二割程度の落伍者が出たと記憶している。このような多忙で厳しい訓練であったが、また楽しい一面もあった。飛行機、特に空中勤務者は一般兵科と違い特別待遇であった。給与には危険加俸がつき、食事は大変な御馳走の大豪華版、飯は銀白米、デザート付き、当時不足がちな、肉、魚貝から酒類、タバコ等何一つ不自由しなかった。同じ将校集会所での食事でも、一般兵科の将校さんは麦飯で、副食も一般食の一品だった。空軍である故にの待遇だった。が私は心中、決戦時だ「奢る事罷り成らぬ」だった。

昭和十九年十月卒業と同時に任官し、晴れて陸軍少尉となり、第二中隊付を命ぜられ、即原隊より東部軍司令部（司令官・藤江大将）作戦室通信

班勤務を命ぜられ、東京へ出向する。東部軍司令部は皇居および関東全域を防衛する元締である。宮城のお濠内に司令部があり。陸上軍防衛集団、防空戦隊集団、高射砲集団、電探部隊、偵察飛行師団から構成され、作戦室には中央に関東全域の作戦盤があり、時々刻々の動きを参謀が駒を動かしながら作戦を立てる。新しい命令が出れば、それぞれの隊へ担当の通信部から伝達すると共に、第一線の状況を作戦室に伝えるシステムである。私は末席にて傍観拝聴する。

日本軍は既にマリアナ沖、フィリピン（ア号）作戦に敗れ、サイパンは十月に陥落し、間もなくB29による日本本土への爆撃が予測された。我が下志津司偵本隊はサイパンの米軍航空基地や、硫黄島方面の偵察の任に就いていたが、特に本土決戦になれば関東方面への米軍上陸地点を九十九里浜（千葉県）と想定され、同方面の太平洋海面の定期的搜索も命ぜられたのである。よって千葉の銚子を基点とした海上の扇状搜索を実施すること

となった。

扇状搜索とは四機がペアを組み、基点から、それぞれ方向に向かって、同時に二〇〇キロ沖に飛び、五〇キロ隣接機方向へ変針。次いで基点に帰来する。所謂三角航法の複合システムである。このシステムに依る搜索のテリトリーは必ずダブルチェックされ、敵の動向を一早く把握し得る、確率の高い搜索法である。前述のごとく東部軍における私の責務はこの搜索機との連絡で、無線通話及び暗号電信によるが、敵の解読力が優れているので、生電は御法度、事前に打ち合わせを行い、短いモールズで交信した。但し、長文ものは数字で打ち、乱数表による解読と云う次第です。

果たせるかな、十一月一日のB29来襲があり、日を追って爆撃が激しくなる。東部軍所属の第十飛行師団も本格的迎撃態勢を整えた。海軍も独自の防空陣を張っていたが、正直云って、陸軍と海軍はバラバラの感が無いでもなかった。

飛行師団は第二十三・四十七・五十三・二四四の各戦隊があり、二式戦（鍾馗）、三式戦（飛燕）、四式戦（疾風）の主力戦闘機で編成されていた。十一月二十四日から始まった米軍の本格爆撃は、一万メートル上空で接近し、しかも強い偏西風に乗ってくる。その速度には友軍の戦闘機には追い付けなかった。また高射砲も八千メートルが限度だった。敵機は思いのまま行動した。歯がゆい限りだった。日本と米国の技術力の差をまざまざと見せつけられ切歯扼腕せり。

右の結果、第十飛行戦隊は各戦隊に体当たり専門の「震天制空隊」を編成し、この活躍でやっと戦果を挙げられたが、圧倒的物量で押してくる力の差はいかんともしがたい。成層圏を四本の白線を引いて来襲するB29。たまたま震天隊の攻撃を司令部の屋上から観戦する機会があった。友軍の戦闘機が体当たりして天空に飛行翼がヒラヒラ舞い落ち、B29から白煙が立ち昇る。体当たり成功。しばらくして、日本機の落下傘が開き、搭乗

者無事脱出する。思わず「万歳！」と叫んだものだ。後刻判明、あの体当たり機は、東部軍司令官陸軍大將藤江惠輔より感状が授与された。第二四戦隊小林大尉と知った。

敵は昭和二十年になって夜間空襲の焼夷弾攻撃を無差別に行った（非戦闘員攻撃）。照明燈に照らし出されたB 29に高射砲が発射され、炸裂した瞬間は花火大会かと思われる錯覚に落ちた美しいものだった。しかし市街地は多方面にわたり火災が発生し、この世の出来事とは思えぬ光景が出現し、民衆の阿鼻叫喚と化した。この時の東京大空襲を神田の兵舎（疎開を終えた小学校）で体験することとなったが、一夜明ければ一望焼野ヶ原。東京湾まで見渡せる変わり果てた東京であった。丸焦げの累々たる屍体。一般市民を巻き込んだ戦争は、一日も早く止めるべきだと思った。

昭和二十年三月、硫黄島、それから沖繩へ米軍上陸。私は下志津へ帰隊し、百式III型に搭乗す

る。この時点で、第十飛行師団の全搭乗員は特別攻撃隊員となる。「神鷲隊」は沖繩特攻、「振武隊」は関東防衛である。「神鷲隊」の連中は、下志津で連日特攻訓練に徹す。訓練が終わった攻撃隊は六機編成で当隊から誘導機に先導されて、目的地に向かうこととなった。

出陣が決定した隊員は個室を与えられ、出入口には御幣を張って、生き神様として処遇されたのである。私も出陣式に立ち合ったが、出撃に際し、特攻隊員は飛行場で別れの宴を張る。我が師団からの初めての出陣式には賀陽宮殿下、片倉飛行師団長も出席され、恩賜の酒と煙草が配られ、一人一人と挨拶を交わされ激励をされたが、その場の雰囲気はさほどの緊迫した悲壮感は無かったと記憶しています。

日を追ってじりじりと包囲網を縮めてきた米軍は、硫黄島から戦闘機P 51や、機動艦隊からのグラマンの飛来が多くなった。

部隊は栃木県壬生飛行場へ移動する。地上の兵

舎は、戦闘機の二〇ミリ機関砲やロケットの攻撃を受けるため空中勤務者は地下兵舎に移転する。

飛行機は必ず誘導路にて場外の防空壕に退避させる。従って緊急発進の対応ができず戦力の大幅な低下となった。爆撃に次ぐ爆撃で航空機生産工場は破壊され、新鋭機の補充も少なく、部品器材の補給も低下、整備員の熟練者も激減し、特に燃料不足のため「松根油」を使用する。ガソリンに混入すると、オクタン価が通常一〇〇のところが一〇以下になるといふ状態です。このため高高度の飛行は不可となり「貧すれば鈍する」日本は加速度的に敗戦の方向へと落ちて行った。

五月、中隊より小生以下三人、新潟の飛行場へ出向命令が出る。状況説明では、米潜が日本海に出没し、大陸から内地、特に新潟へ物資を運んでくる日本の輸送船を魚雷攻撃する被害が拡大しているのを防止するためとの事。警戒にはドイツ製の対潜警戒機（フィゼラー）を使用した。着任早々、同機の両翼に二五キロ爆弾二発を装備して

警戒飛行することになる。

新潟の飛行場を発って佐渡南端の灯台、そこから西進して能登の先端灯台、そして新潟へ帰還する。勤務中には何らの戦果もなかったが、一度佐渡と新潟の中間で「特報」が入る。敵潜に攻撃され、火災発生中との事で、緊急進行して現場上空へ、敵影はなく輸送船は炎焼中で、今にも沈没しそうになって傾いていたのが強烈に印象に残っています。そして現隊に復帰して勤務精励です。

米軍、広島へ原爆投下。自隊には東部軍司令部との直通の情報部があつて、即日広島の状態を把握することができた。一発の特殊爆弾の強力なる威力を知り、いよいよ最後の時が来たと思わざるを得なかつた。

敵はますます勝ち誇り、六月末頃より我が飛行場にも連日艦載機による機銃やロケット弾攻撃を敢行してくる状況となった。飛行場大隊の防衛機銃隊も、あまりの激しい攻撃に対して反撃もでき

ぬようだった。己の身を守るのが精いっぱいの状態だった。何が恐ろしいといっても、頭上に迫り来る幾百、千の機銃猛射の曳光弾・弾丸・ロケット攻撃である。鷹に狙われた小雀か、蛇に睨まれた蛙のごとく残念ながら五体が硬直し、微動だにできず、だった。

友軍の飛行機の離着陸は、指令塔からの指示により行うが、敵機の跳梁する状況では、敵が退去した時でないとは行動できない。GOサインでスタートしたり、着陸の許可が出て滑走路に下りてくると、雲の中に隠れていた艦載機が急襲する。しばしば撃墜炎上される事があった。地上勤務の軍人は「切歯扼腕」するも致し方無しだった。今や日本本土の空は、完全に敵の制空権下に入ってしまった。

一方的防戦の続く中、八月十五日終戦の勅諭下る。我々に対し海軍航空隊より徹底抗戦の呼び掛けがあったが、特に我が中隊は、短略的な感情論に拘せず、斉藤中隊長の下に団結し、師団命令を

尊重する方針を取った。旬日を経ず米軍より師団所有の全機を飛行場に並べ、一週間以内に全機のペラも外せとの命令が来た。

急遽重要書類（私物を含め）を焼却する。次いで第一線の空中勤務者は、早急に解任、帰郷さすべしの令下る。我々は九月一日付にて解任、除隊なる。小生は九月十五日、宇都宮から東京經由で帰神しました。

沿線の重要都市は申すまでもなく完全な焼野原で瓦礫の山だった。種々悲話、哀話があったが、胸奥に綴り込めて、あの世まで持って行く。今振り返れば悪夢のような戦時中であつたが、その功罪は歴史が評価するだろう。しかしながら私の人生八十年の間で、短期間ではあつたが、一番インパクトのある時期であつたことは確実だ。

なお若くして尊い生命を、日本の現今の礎のために捧げた勇者達の御冥福を心より祈ります。

追記・語り終えて、長嘆息「同期の友は（学徒動員軍人）南に北へと任地は異なりましたが、大

多数が散華した」と暫時追想、眼頭に光るものを見た。筆者。

## 極秘電文

### 敵冬に頭から水を冠す

香川県 向山正数

私は東香川の松原で生まれ、家族は祖母と両親、兄が一人、私は次男で弟が一人、妹が二人の五人の兄妹の八人家族でした。

讃岐地方は瀬戸内海に面し、南に四国山脈（石槌山、剣山）があり、さらに中国地方が北風を防いでくれる関係で、気候温暖にして一年中生活し易いところでした。土地柄は事のほか人情味豊かで、空海（弘法大師様）が生誕なされたごとく、我が家においても家族団欒で楽しく、毎日笑い声が家内中に充満していました。

学業も義務教育終了後、高等科を経て社会人と

なり、町の青年会に入り、近隣の織物会社に勤めました。週三日、夕方から青年学校に通学し、卒業時には最優秀であると表彰されました。家業は地味が豊かですから農業が大半でした。父親は副業的に手袋製造会社に勤務し、機械修理等を行い会社には絶対必要な人として働いていました。

世はまさに軍国時代ですから、一に軍隊、二に軍人と、若者は心身鍛錬、精神修養と身体も心もお国の為にと教えられ導かれました。私も申しましたごとく働き、青年団でも活動し、柔道や銃剣術にも励み、柔道二段になっていました。

私は十九歳で徴兵志願を志しました。大川郡津田町公会堂で適齢者と一同に会して行われました。すべて終了しまして、全員整列し、徴兵執行官から、一人宛に申し渡しがあり、「向山正数、甲種合格」と発表されました。私は大きな声で「復唱！ 向山正数、甲種合格、有難う御座いました」と申告したら「元氣よし、向後、その気合